

契約妻は御曹司に
溺愛フラグを立てられました

綾瀬麻結

Mayu Ayase



Eternity
BUNKO

目次

契約妻は御曹司に溺愛フラグを立てられました

5

書き下ろし番外編

愛のオークション

〜溺愛フラグ、取り合い勃発中!?

333

契約妻は御曹司に

溺愛フラグを立てられました

序章

梅雨つゆが明けると同時に蝉せみの大合唱が始まり、本格的な夏の暑さを感じ始めた七月中旬。二十九歳の水谷萌衣みずたにもえは、様々なブランドジュエリーを取り扱う会社ウエルジェリアで役員秘書として働いている。現在は景山宏明かげやまひろあき専務付きなので、普段は役員室の隣室にいるが、今は同僚たちがいる秘書室の自席で仕事をしている。

このあと景山の付き添いで出掛けるのだが、彼にわざわざ執務室に迎えに来なくていいよ。秘書室に行つて、同僚たちと親睦を深めておいでとと言われたためだ。とはいえ、休憩時間でもないので仕事に専念するが……

「次は……」

パソコンの液晶画面に映し出したスケジュールを見ながら、会議室と執務室の清掃の予約を入れる。そして、昼食後に手渡された領収書の精算処理を行った。

これで、今日やるべき仕事はだいたい終わつたかな？

萌衣は痛みが出始めた首を回し、凝り固まつた肩を指で強く押した。

萌衣の普段の仕事は、主に景山のスケジュール管理で、出席する会議の取捨選択、彼にアポイントを求める人たちとの取り次ぎなどを行っている。

タブレットパソコンがあれば、どこにいても仕事に取り組めるが、やはりこうして同僚たちの話し声や活気を肌で感じ取れる場所で作業すると、とても気分がいい。

もう少しここにいたい気もするが、そうも言つていられない。そろそろ動いて、景山を迎える準備をするべきだ。

パソコンの電源を落として席を立つと、秘書室長の佐山さやまの前で立ち止まった。

「室長、よろしいでしょうか」

「うん？ どうした？」

仕事中の佐山が顔を上げると、萌衣はこれから景山に同行する旨を告げた。

「わかった。予定では、IT企業のHASEソリューションだったな。気を付けて行つておいで。……まあ、水谷さんに言うのは野暮だけだな」

佐山がそうだろうかとと問いかけるように微笑みでくる。日頃からジムに通つて身体を鍛えている佐山は、五十代でありながら四十代前半に見えるほど若々しい。

萌衣は信頼を寄せられるのが嬉しい反面、認めてもらえないのは仕事だけだと思つと、もの悲しい気分にさせられた。

そんなことは、今に始まつたわけではないのに——と心の中で自嘲するが、萌衣はそ

れをおくびにも出さずに口元を緩める。

「とんでもございません。それでは失礼いたします」

挨拶したのち、萌衣は自分のデスクへ歩き出した。

それに合わせて、今年入社した二十二歳の榎原とその四歳年上の吉住が顔をつきあわせながらクスクス笑っているのが視界に入った。

楽しそうな雰囲気になんと心が和み、後輩たちに目が吸い寄せられる。

「どうしたの？」

「あっ、水谷先輩！」

子猫のように可愛らしいショートボブの榎原と、切りっぱなしのワンレンダスポブが印象的な吉住が席を立ち、満面の笑みを浮かべた。

「吉住先輩に聞いていたんです。明日のデートではどこに行くのかって」

「デート？」

萌衣が問いかけると、吉住が頷く。

「明日は休みなので、彼氏と予定があると言ったら、榎原さんがどこに行くのかを知りたがって」

「だって、吉住先輩に教えてもらった場所はどれも思い出に残るぐらいいいところで。当然知りたくなるじゃないですか。……あっ、水谷先輩はどこに遊びに行かれる予定な

んですか？」

「わ、わたし？」

「水谷先輩がカノジョだったら、どこにでも連れて行って喜ばせたいって思うもの」

二人は、先輩のデートはどういったものなのか、あたしたちにもご教授お願いしますとばかりに見つめてくる。

こういう恋愛話が出た時、萌衣は毎回付き合っている男性はいないと真実を告げるが、誰一人信じてくれない。

場の空気を読むのなら嘘を吐けばいいのかもしれないが、後輩たちを欺きたくはなかった。

「ごめんね。わたしからはなんとも言えないかな。だって誰とも付き合っていないから——」
「またまた！ 水谷先輩ほど素敵な女性を、男性陣が放っておくはずがないじゃないですか」

「そんな風に言いますけど、わかっていますからね。凄い人と付き合っているから隠すんだって」

吉住の言葉に、榎原はうんうんと頷いて同意を示す。

「女性として懂れます。はっきりとした二重に、肌のキメも細かくて……笑顔もとても素敵！ すらりと手足が伸びたプロポーシオンも洋服のセンスもいいし」

そう言って、榎原が両手で萌衣が着ている服を示す。

膝頭が隠れるボックススカートの、フレンチスリーブのブラウスを合わせているだけなので、センスがよいとは言い難い。

ただ、秘書の服装としては合格点ではあるが……

「そう？」

「そうですね！ セミロングの髪も艶やかで綺麗でしょ。あと——」

急に榎原が周囲をきよるきよる見回し、内緒話をするように口元に手を添えた。

「おっぱいが大きくて羨ましいです」

萌衣は驚いて、薄い生地を押し上げるEカップの胸元に目線を落とした。

「身長が一六〇センチ以上あるのもあって、そこだけが強調されすぎないですし。本当に懂れます！ 聞いてくださいよ。彼氏ったら、あたしの胸は小さいからいろいろなことができないって」

「榎原さん、そこまで！」

吉住がぴしゃりと言い放つと、榎原が慌てて口を手で覆った。

「す、すみません！ 仕事なのに、あたしったら」

「ううん、いいのよ。誰かに聞かれたわけでもないし。だけど、そうね……そういう話は男性がいない密室にするのがいいかな」

萌衣は秘書室にいる男性秘書たちを窺って、榎原を窺める。彼女は何度も首を縦に振り、吉住はやれやれとため息を吐いた。

「じゃ、わたしはこれから外出するから、あとはよろしくね」

元氣よく「はい」と返事をする後輩たちに微笑み、萌衣はタブレットパソコンをトートバッグに入れる。

そうして秘書室をあとにしたが、途中で小さく肩を落とす。

これまでの人生、萌衣は何事にも手を抜かず努力してきた。学生時代は勉強を、部活では上下関係の築き方を、バイトができる年齢になれば社会の繋がりを、そして美容の話で盛り上がれば、自分に似合う髪型や服装などを研究した。

その結果、今の秘書の地位を得られたと言っても過言ではない。

しかし、いくら努力しても叶わなかったものが一つだけある。それは、これまで一度も男性と付き合った経験がないことだ。

もちろん好きになった男性はいる。中学生の時に仲が良かった同級生で、好意を抱かれていた。

そう思っていた。

でも違った。彼は友人に、水谷が好きなのか？ ああ、好きなんだ！ とからかわれど、違う、僕が好きなのは水谷じゃない。彼女の親友の——と云ったのだ。

男性の考えがわからず悶々^{もんもん}としているうちに高校生、大学生となり、恋愛というものがわからなくなった。

だからといって、男性が苦手なわけではない。高校時代から親しくしている男友達もいれば、大学時代に気になっていた人もいる。ただ、親切にしてくれたからなのか、それとも純粹に彼を好きなのがわからず、結局何も進展がないまま今に至っている。いったいどうすればいいのか。どういう感情を持たれると恋愛に発展するのか。

考えれば考えるほど恋愛迷子が重症化していった。このままだと、結婚どころか恋愛も経験しないまま三十代を迎えてしまうだろう。

萌衣はため息を吐いたが、すぐに背筋をピンと伸ばして気持ちを立て直す。

今は、仕事に集中しなければ……

萌衣は景山と待ち合わせをしている受付フロアへ向かいながら、スマートフォンを取り出し、会社が契約しているハイヤーに連絡を入れた。

「お世話になっております、ウエルジュリアの水谷です。予定どおり十五時配車で……はい、よろしくお願いいたします」

あとは景山を待つだけだ。

準備に抜かりはないよね——と頭の中で整理しながら受付フロアへ向かう。

「だったら、水谷さんは？」

突然自分の名前が聞こえて、萌衣は振り返る。ちょうど休憩室へ続く廊下で、男性二人が話し込む姿が目に入った。見覚えがないためどの部署かは不明だが、萌衣より少し年上みただ。

もしかして、秘書室へ立ち寄る用件が？

萌衣は腕時計に視線を落とす。景山を迎えるまであと十分はあるので、ここで彼らの用件を聞いても間に合う。

そう思い、そちらへ足を踏み出すと、男性が「ないない！」と声を上げた。

萌衣はすかさず壁際へ寄って身を隠す。そうする必要はないのに、男性の強い口調に驚いてしまったせいだ。

「才色兼備ってああいう女性を言うんだよな。水谷さんが素敵だっというのはわかってるんだけど、付き合うなら別の女性を選ぶよ」

「ああ、わかる。水谷さんって傍^{はた}から見ると分にはいいんだけど、自分の女にしたいかってなると、それはちょっと違って……。高嶺^{たかね}の花過ぎて恋愛対象としては無理なんだよな」

高嶺の花？ 恋愛対象としては無理？

その言葉に、萌衣は苦笑した。

どうして皆勝手に、才色兼備^{うっわ}という器に萌衣を押し込むのか。そもそも才色兼備ではないし、高嶺の花でもない。学生時代に努力した結果であって、決して皆が一目置く

ような存在ではない。

恋がどういったものかわからない萌衣は、はつきり言つて欠陥品。恋を経験してきた同僚たちよりも劣っている。

なのに誰一人として、萌衣という人物をきちんと見ずに決めつける。

萌衣は悲しい気持ちのまま、トートバッグを持つ手に力を込めた。

「友達で充分だよな。カノジョにしたら、誰かに奪われるんじゃないかって気が気でないよな」

「それで……合コンで会つたあの子に手を出したんだ？」

「おい、そんな風に言わないよ。あれでも可愛いんだから」

唐突に男性の話し声が大きくなり、こちらに歩いてきたのがわかった。萌衣は咄嗟に身を翻してその場を去つた。

——数分後。

受付フロアの中央に設けられた円形のソファには、談笑や打ち合わせをする社員たちがいた。

萌衣は受付嬢に会釈し、景山を待つためにカウンターの脇に立つ。背筋を伸ばして仕事モードに切り換えるものの、先ほどの話を思い出さずにはいられなかった。

男性社員の言うとおり、萌衣は誰からも恋愛対象としては見られない。彼らは好意を向けつつも、そこに恋情は湧き起こらないのだ。

もう来年には三十歳になるのに、このままでいいの？ ——そう悲しく思いながら景山を待っていると、彼が受付フロアに現れた。

年齢相応な中太りの体型だが、髪は黒々している。昔はかなりモテたとわかるぐらい笑顔が爽やかだ。数年前にシングルになり、今も人生を謳歌している。

理由は、これから向かうHASEソリューションに行けばわかる。ただこの件を知っているのは専属秘書の萌衣のみなので、決して口外はできない。

萌衣は歩き出して、景山を迎える。

「お車のご用意はできております」

「ありがとうございます」

萌衣は礼儀正しく首を縦に振り、エレベーターのボタンを押す。

「お先に失礼いたします」

景山に声をかけてエレベーターに乗ると彼を招き入れ、オフィスピルの玄関口となるフロアで降りた。

ぶわつと熱気が身体にまとわりつくような暑さに眉根を寄せつつ、すぐにオフィスピルのロータリーに顔を向ける。そこには既にハイヤーが横付けにされていた。

顔馴染みの四十代の女性運転手がドアを開けると、景山が乗り込む。

「水谷さんも」

隣に座るように示されて、萌衣も横に腰を下ろした。車が走り出すと、景山が咳払いする。

「今日、水谷さんは上まで来なくていいよ。一階のカフェでもゆっくりしてほしい。終わったら、こちらから連絡を入れる」

「承知いたしました」

景山がそう言うのは、最初からわかっていた。

萌衣が勤めるウエルジェリアは、現在ネット通販でも業績を伸ばしている。それもあ
り、システム管理は最重要事項の一つに挙げられていた。システム強化のためHASE
ソリユーションに発注書を送ったが、こちらが望むシステムを組むのは難しいと言われ
てしまう。

交渉が一年も続いたある日、萌衣は景山からHASEソリユーションとのアポイント
メントを求められた。

システム関連の担当者も通っていたが、彼らとは別に、景山もHASEソリユーショ
ンの吉沢桐子よしざわとうこ常務と面会を重ねた。それが切っ掛けとなって好転し、契約の運びとなっ
たのだ。

もちろん断られ続けてもしぶとく交渉を続けた担当者の成果でもあるが、やはり陰の
功労者は景山だと萌衣は思っている。彼が五十代には見えない美しい吉沢と付き合い始
めて以降、急にこちらの要望に沿ったシステム開発に乗り出してくれたためだ。

吉沢は夫と死別して独身なのもあり、景山と交際する分には何も問題はない。しかし
二人はお互いに会社での立場があるので、人目を忍んでこっそりと付き合っている。だ
から表立って、彼の後ろ盾があったとは言えなかった。

萌衣は景山がスマートフォンを弄り出したのを横目で捉えて、そっと窓の外に視線を
向けた。

車がHASEソリユーションの入るオフィスビルに到着するまで、流れる景色と歩道
を歩く老若男女を眺める。

渋滞のせいで通常より十分ほど遅れたが、約束の時刻の十五分前に新宿しんじゅくにある高層オ
フィスビルに到着した。

萌衣たちは車を降りてロビーに足を踏み入れると、許可証を得てエレベーターに乗る。
そしてHASEソリユーションが入った階で降り、受付で吉沢と面会の約束がある旨を
伝えた。

「こちらでお待ちくださいませ」

受付嬢がにこやかにソファを示す。萌衣は会釈をし、既にそこに座る景山のところへ

移動した。

一分も経たずに、二十代半ばの秘書が現れた。

「景山さま、お待ちしております。ご案内いたします」

外見が兎のようにふわふわとした可愛い女性を見て、萌衣の口元が自然と緩んでいく。

「水谷さん、またあとでね」

「承知いたしました」

萌衣は恭しく返事をし、景山を見送る。彼の姿が視界から消えると、受付嬢に会釈してエレベーターホールに向かった。

あとは景山からの連絡を待てばいい。

萌衣はエレベーターに乗り込み、ロビーで降りた。カフェで待つつもりだったが、店内はスーツを着た人たちが大勢いて座れそうにない。

それならばテイクアウトにして、屋外に設置してあるベンチで食べればいいが、三十九度を超える場所待つの辛い。

だったら、どうしようか。

うーんと唸っていた時、萌衣はあることを思い出した。

H A S E ソリユーションには景山と一緒に何回か訪れているが、ほとんど彼の傍にいたのでオフィスビルや社内を見て回る余裕はなかった。

でも一度だけ、景山から喉を痛めた吉沢のためにカフェでミルクを買ってきてほしいと頼まれた際、ロータリーに通じるエントランスとは反対側にあるフリースペースを偶然見つけた。そこにはテーブル席とソファがある。

あそこでなら、ゆっくりできるかも……

萌衣はそう決断するや否や、アイストラテとスコーンを注文し、それを受け取ってカフェを出た。

記憶を辿ってエントランスへ続く自動ドアを通り過ぎ、さらに奥へと進むと、目的のフリースペースが目に見えび込んできた。

「良かったー」

場所を間違っていないかと思ったらとホッと胸を撫で下ろしながら、周囲を見回す。

フリースペースには数人の男性しかおらず、新聞を読んだり、タブレットパソコンで仕事をしたりしている。皆他人を気にせず、自分のことに没頭していた。

ここでならのんびりと過ごせるだろう。

萌衣は空いている椅子に腰を下ろした。紙のコーヒーカップとスコーンが入った袋を置き、トートバッグからタブレットパソコンを取り出す。

電源を入れて起動させている間にアイストラテで喉を潤し、スコーンを口に放り込んだ。そして仕事をするべくスケジュール管理アプリを開き、景山の出席を打診された会議の

調整を始める。

しかしその途中で、萌衣の手から力が抜けていった。ふと、景山を受付フロアで待っている時の記憶が甦ったからだ。

男性社員たちがしていた萌衣の噂話を……

身勝手な憶測で萌衣にレットテルを貼る人が多いのは、もう経験からわかっている。とはいえ、それを耳にするとやはり落ち込んでしまう。

このままでいいの？ しかも来年は三十歳だ。恋愛の仕方がわからない以上、ずるずると時間だけが経つに決まっている。この調子では、結婚どころか一生恋愛すらできない。今までと変わらない生活を送っていたら、尚更だ。幸せな結婚をした先輩たちのような、恋愛を謳歌する後輩たちのような運命の出会いなど期待できない。

だったらどうしたらいいの。

萌衣は唇を引き結び、検索エンジンを立ち上げた。無作為に答えを求めてカーソルを動かしていた時、表示された広告にピタッと目が留まる。

「お見合いサイト？」

十万単位の登録者数に、万単位の成婚者を誇る紹介文に目が釘付けになる。

どうして気付かなかったのか。萌衣にとって一番いい手は、お見合いでは？

だいたい知り合った男性はほとんど自分を敬遠するが、お見合いの場であれば変な先

入観を持たずに向き合ってくれるのではないだろうか。

最初は価値観が合えばいい。恋愛感情などなくていい。時間をかけて友情を育むところからスタートすれば、きっといつしか愛が生まれて、幸せな家庭を築ける。

「そうよ。こんなわたしを選んでくれる男性が絶対にいる。もし出会いのチャンスがあれば、わたしは躊躇わずに——」

「その手を掴み取る？ だったら、俺でどう？」

お見合いサイトのリンクをタップしようとした、まさにその瞬間だった。

真上から振ってきた声に驚いて顔を上げると、三十代ぐらいの男性がいた。甘いマスクの彼はテーブルについた手に体重をかけ、萌衣を見つめている。

耳元の上を刈り上げたマッシュウルフ風の髪型、キリリとした眉、意志の強そうな双眸、真つすぐな鼻筋、そして形のいい唇を目視し、再び面白そうにこちらを覗き込む男性に焦点を合わせた。

この人を知っている——そう思うや否や、記憶にある人物とびたりと重なった。

萌衣は慌てて腰を上げようとするが、男性が手を上げて、立たなくていいと示す。堂々とした態度で空いた椅子に座る男性は、その間も萌衣を凝視していた。

圧倒的な存在感に、萌衣の身体がかすかに震える。

そうなるのも当然だ。目の前にいる男性は、H A S E ソリューションの御曹司、長谷

川玖生だからだ。

以前、吉沢の執務室を出てエレベーターホールへ向かっている時に偶然長谷川と出くわし、彼女の紹介で景山と一緒に挨拶をさせてもらった。

記憶が正しければ、長谷川は現在三十二歳。管理本部の部長補佐として財務部、情報システム部、経営企画部を統括している。

ただ景山と長谷川には仕事の接点が全然ないため、直接言葉を交わしたのはその一度きり。それ以降はHASEソリューション内の廊下で数回見かけたことがあったが、長谷川も部下を従えて忙しくしていたのもあり、遠くから会釈をする程度だった。

そういうわけで、顔見知りであっても親しくはない。だからこそ、長谷川の方から声をかけてきたことに驚きを隠せなかった。

しかし秘書気質が身に付いているのもあり、萌衣はさほど顔に感情を出さずに頭を下げた。

「お久しぶりです」

「俺のことを覚えていてくれたんだ？」

もちろんだ。ただ社外であったため、すぐに思い出せなかったが……

「今日は……景山専務のお供で？」

「はい。景山は吉沢常務と面会中です」

「じゃ、俺と話す時間は少しあるんだな？」

話す時間？ お互いに接点があるわけではないのに、いったい何の話をしようと云うのか。

だからといって断れるはずもなく、萌衣は平然とした態度を装って長谷川に向き直った。

「なんででしょうか」

途端、長谷川がクスツと笑った。その仕草には男っぽい艶があつて、萌衣は困惑する。後輩だったら、たちまちうつとりと長谷川に見入るかも知れないが、萌衣は何か裏があるように思えて身構えてしまう。以前挨拶を交わした時と全然違う態度だからだ。

「面識はあるとはいえ、俺たちは気軽に言葉を交わすほど親しくない。にもかかわらず、こうして声をかけられても一切焦らない。そう、もの凄く冷静沈着。感情のない人形みたいなのに……目を奪われるほど綺麗だ」

面と向かつて異性から「感情のない人形」と言われて、無意識に眉根を寄せる。それでもお構いなしに、長谷川はテーブルに肘を突き、心持ち顔を近づけてきた。

「話を戻すけど、君の独り言が聞こえてさ。お見合いサイトで相手を探すつもりなら、俺にしないか？」

俺って、わたしと？ 結婚を!? ——と、あまりにも突拍子のない話に、萌衣は目を

見開く。

何がどうなつてそう提案してきたのかがわからず、ただ長谷川を見つめていると、彼がにっこりした。しかしその直後、女性を蕩かせる色艶を綺麗に消し、鋭い眼差しで萌衣を射貫いた。

「もちろん普通の結婚じゃない。……契約結婚の申し入れだ」

「……契約?」

「ああ。結婚したい者同士がここにいる。しかも、俺が望む条件を持ち合わせる君がね。俺が提示する条件を呑めるなら、君を妻に迎えてもいい。どうだ?」

そこには、最初に萌衣に声をかけた、あの甘いマスクの長谷川はいない。商談相手に駆け引きをするような勝負師の顔をしている。

……うん? 勝負師? それって、切羽詰まっているという意味? この人が?

「俺の条件は二つだけ。一つ目は、お互いに尊重するが干渉し合わない。二つ目は、どちらかが離婚したいと望めば争わずに応じる。それだけだ。呑んでくれるのなら、君の要望にも応じる。結婚相手がほしいという願いを」

淡々と述べるが、萌衣をターゲットにした理由が釈然としない。

萌衣が聞き齧った情報によると、長谷川は女性に不自由しておらず、いつも隣に美女を連れているらしい。萌衣はその光景を見たことがないが、彼自身を見れば領ける話だ。

だったら、萌衣ではなく恋人に契約結婚を申し入れたらいいのに……

そう思うのに、正直契約結婚に心が引かれていた。それは長谷川の求める契約結婚は、お見合いのみならず普通の結婚にも通じる部分があるためだ。

相手を尊重して干渉し合わなければケンカはしないし、性格不一致で争わずに離婚もできるのだから……

これこそ自分が願う結婚生活では?

心の天秤が大きく動き、長谷川の方へ傾く。でもピタッと止まりはしなかった。やはり何故か萌衣なのかという謎が解けない。

「どうしてわたしなんですか? お付き合いされている恋人に頼むのが一番いいと思えますが」

疑問を口にする、長谷川が不意にふわっとした笑みを零した。

「はつきり言う。俺は独身主義者だ。現在の恋人に束縛されるのさえ嫌だ。そんな俺の意思を無視する両親から、政略結婚をさせられそうになってる。相手がうちにとって大切な取引先の令嬢なのもあり、そう簡単に断れない」

長谷川が気怠げに視線を落とす。しばらく一点をじっと見つめていたが、萌衣の身体を舐めるように少しずつ視線を上に乗かしていく。その意味深な眼差しに、萌衣は思わずテーブルに置いた手に力を込めてしまう。すると彼が手を伸ばし、萌衣の手の上にか

ぶせた。

心臓がドキッと激しく打つ。その感覚に動揺を隠せずに、自然と瞬きのスピードが速くなっていた。そんな萌衣の手を長谷川が握り締める。

「俺が結婚を急ぐのは、政略結婚を逃れる算段を早くつけたいから。それで俺に執着しそうにない女性を探していた時、偶然君の独り言が聞こえた。……君が望む男はここに」と

萌衣がおずおずと目線を上げると、長谷川は軽く顎を上げて彼自身を示した。

「結婚相手は誰でもいいわけじゃない。美人なだけでは駄目だ。それなら梢……両親が嫁にと考える子でいい話になる。だったら俺が選ぶ相手は、容姿のみならず気配りが細やかな女でなければ」

「それがわたしだと?」

「ああ。君が役員秘書として有能だと、部下から聞いている。俺も遠目から君の立ち居振る舞いを見ていた。そつがなく控えめなのに、凛とした姿勢は見ていて好ましい。君なら俺の両親も納得するに違いない。もし条件を呑んでくれるなら約束する。妻には不由のない生活を与える」と

つまり契約という縛りで結婚したとしても、長谷川は萌衣を妻として敬うと言っている。

お見合いでしか男性と結婚できないと思った萌衣と、政略結婚から逃れたい長谷川が求めるものは全然違う。しかし最終的に手に入れたものは、二人とも同じ。

この出会いは運命かもしれない。相手の気持ちはどこにあるかと悩まなくていいのだから……

もちろん条件を求めてくる人との結婚に不安はないのかと問われれば、即座に答える。その反面、萌衣にはこういう結婚が合うのではないかとという考えも生まれていた。

そもそも、お見合いサイトに登録しようとした時も選り好みなど考えていなかった。ただ上辺ではなく自分を認めてくれる人との出会いを求めている。

その点、長谷川は萌衣の中身を評価してくれた。これこそ、萌衣が望む結婚相手ではないか。

このチャンスを逃せば、きつと後悔する!

それがわかっているのに、このまま承諾することに尻込みしてしまう。でも前を向かなければ、何も始まらない。

萌衣は意を決して、きつと面を上げた。

「一つだけ、わたしの気持ちを言わせてください」

「どうぞ」

長谷川が淡々と答える。さながら、このジュースを飲む？、ああ、と言ったような返事の軽さに、怯みそうになるが、萌衣は勇気を振り絞って彼の目を見返した。

「結婚が契約だとしても、わたしは夫婦生活に幸せを求めたいです。それでもいいんですか？」

「ああ。契約条項の二点さえ守れるのなら、その間は君は俺の妻だ。妻である以上、君の体面は必ず守る」

「わかりました。……では、一週間後にお返事します」

「一週間後？ どうして？ チャンスがあれば、躊躇わない……みたいなことを言ったのは、嘘だったのか？」

長谷川は声を抑えながらも不満げに言う。

「君には悪い話ではないはずだ」

「わかってます。前向きに検討するので、時間をください」

萌衣は純粹にそう思っただけなのに、長谷川が心なし面白くなさそうに唇を引き結ぶ。でも不意に小さく唇の端を上げた。

「時間、ね。……それを与えることで間違った方向に進まないようにしないと」

間違った方向？ わたしが？ ——と小首を傾げると、急にぐいっと手を引っ張られた。

「あっ……」

突然萌衣の身体が前のめりになる。それに合わせて、彼が顔を近づけてきた。萌衣が驚いて目を見開くと、なんと彼が口づけをしてきた。初めての柔らかな感触に、身体が硬直する。耳に届いていたざわつきが遠くへ去り、思考回路も遮断された。

理由のわからない感覚に呆然としていると、長谷川が萌衣の唇をちゅくつと吸って顔を離した。

「ふーん、そんな表情もするんだ。結婚したら楽しめそうだな。……さてと、これで周囲は俺たちが、付き合ってる、と思うだろう。じゃ、また連絡する」

出し抜けにキスされた衝撃で目を白黒させる萌衣に、長谷川が片手を差し出し、何かを渡せと示してくる。その意味を考える余裕さえなく、ただトクトクトクッと早鐘を打つ鼓動に翻弄ほんろうされていると、彼がテーブルを指で叩いた。

「スマホ」

「……えっ？ ス、スマホ？」

普通に訊き返す萌衣に、長谷川が不可解そうに眉をひそめた。

「返事をくれるんだろ？」

「あつ、はい」

そう、一週間後に返事をすると言ったのは萌衣だ。何度も、連絡先が必要でしょ、と

自分に言い聞かせて、バッグからスマートフォンを取り出す。それを差し出すが、長谷川に「解除」と言われて、あたふたしながらロックを解いて手渡した。

直後、長谷川のスーツポケットから呼び出し音が二回鳴り響く。

「俺の番号だ。登録してくれ。返事、待ってる」

長谷川はスマートフォンを萌衣に返すと、背を向けて歩き出す。彼がフリースペースを出る時に、萌衣と同年代であろう背の高い男性がこちらに会釈して長谷川に続いた。

あの男性は誰なのかと考える余裕もない。遠巻きに萌衣たちを窺っていた人たちもだ。

萌衣は長谷川を見送ったあとも、呆然と椅子に座り続けた。景山を待つ間、何をしたらのかさえ記憶がない。

正気に戻ったのは景山から電話がかかってきた時で、彼と別れてから二時間も経っていた。

それからの一週間。萌衣の頭の中は、長谷川から提案された契約結婚のこと、初めてされたキスのことでいっぱいだった。

そんな状態でも、メリット・デメリットをリストアップするのを忘れなかった。

長谷川と契約を結べば、これから結婚相手を探さなくていいのが一番いい。しかし、彼の妻になれば、普通の恋はできないだろう。彼が提示した条件や、恋人にも束縛され

たくないという思いを鑑みれば尚更だ。

……うん？ 恋はできない？

そこで萌衣は小首を傾げる。どうして自分は恋はできないと決めつけたのだろうか。先は長いのだ。いつの日か夫に恋をするかもしれない。

そう思うや否や、急に萌衣の視界が晴れるように広がっていった。

もう迷わない！——そう覚悟を決めると、萌衣は約束の日長谷川に電話をかけた。

『決めたか？』

「はい。……お受けいたします」

『良かった……。俺にはまったく興味のない女性を得られるなんて、これ以上の喜びはない』

それから契約結婚に向けた動きは、あっという間に進行した。それだけ長谷川がこの結婚を急いでいるのだ。

正直、未来はどうなるのかわからない。しかし、この結婚に一生を託そうと思った萌衣に、不満は一切ない。

会社の総務部には結婚に関しての書類を提出したが、他には誰にも告げず、長谷川が暮らす低層の高級マンションに引越した。

それは長谷川と結婚契約を交わした日から一ヶ月後、八月下旬のことだった。

第一章

青々と澄み渡る空に、燦々と輝く太陽が眩しい十月三日。

社内はかなりバタバタとして、萌衣も忙しく動き回っていた。内定式に出席した来年入社予定の学生たちが、午後から社内見学に来るためだ。

秘書室にも新しい風が入ってきてほしいと期待する秘書たちは、これから来る学生たちに興味津々だった。それは萌衣も同じで、デスクで仕事をしながら内心わくわくしていた。

「楽そうな人が入ってきてくれたらいいな」

榊原が背伸びをしては、学生たちが入ってくるドアを見つめる。ちよつと目を離せば、秘書室を出て学生たちを出迎えそうな勢いだ。そんな彼女の隣で、吉住が頷いた。

「確かに。秘書室の和を乱さない人がいいな。そして優秀な人材だったら尚更いい。そうすればあたしたちの仕事も楽になるし」

「本当に。最近マーケティング戦略部での仕事が増えたんですけど、あそこの井上主任つたら——」

そう切り出し、榊原は井上の文句を並べ始めた。彼女は毎回無理難題を出されて、マーケティング戦略部と秘書室を走り回っているらしい。しかも厳しくあたるのは彼女だけで、同期の小南には優しいのだと怒りを口にした。

それを聞いて、萌衣は頬を緩めた。

二十七歳の井上はマーケティング戦略部のやり手で、同期たちより出世が早い。それは仕事に対して真摯に取り組んでいる結果だ。人を見る目もあって、井上の下に就く後輩たちは成績がいい。彼があればこれやと注文をつけるのは、ある意味指導をしていると考えられる。

つまり榊原がしごかれているのは、井上に有能だと認められたからだろう。

榊原は大らかな性格で、萌衣もびつくりするほど明け透けにものを言う。しかし、秘書としての気配りは細やかだった。佐山も榊原の働きに満足しており、萌衣も彼女に期待している。

そのため、井上の厳しさの意味を教えてあげても良かったが、まだ入社一年目なものあり口を噤んだ。

榊原には、さらに研鑽を積んでほしいから……

「でも仕事なんだし。仕方ないでしょ」

吉住に窘められて、榊原は唇を尖らせる。

「あたしと違って小南には優しいの？ ……彼女が日本人形みたいな清楚系美人だからデレデレするのはわかるけど、あまりにも対応が違いすぎます」

榊原の話に驚き、萌衣は液晶画面から顔を上げた。

萌衣から見れば榊原も充分可愛いのに、同期の小南に嫉妬するなんて本当に不思議でならない。

吉住が佐山に呼ばれたことで榊原も席に戻ったため、萌衣は再び液晶画面に焦点を合わせた。

最近景山のスケジュールが頻繁に変更になるため、管理する萌衣も大忙しだった。学生が来る頃には秘書室にいたいのが、スケジュール調整が終わり次第、執務室へ行かなければならない。

「景山専務か……」

不意に景山とHASEソリユーションへ行った時の出来事が脳裏に浮かび、萌衣の手が止まる。夫を連想してしまったせいだ。

長谷川——改め、玖生との結婚生活がスタートして一ヶ月以上経った。二人の距離感、付かず離れずのいい感じに保たれている。

最初に玖生が、お互いに尊重するが干渉し合わない」と言ったことが、かなり影響していた。

今のところ、玖生は毎日遅く帰ってくるが、萌衣は何も訊ねない。彼が仕事なのか、飲み会なのか、それとも女性と会っているのかさえもわからなかった。

しかし、玖生の様子である程度察しがつくようになった。

実は夫婦生活を始めた際、玖生から、夜は待たなくていい、食事の用意はしなくていい」と言われて、萌衣は律儀に守っている。

そのため、玖生が毎日何時に帰宅するのか知らなかった。だが、君は俺の妻だ。妻である以上、君の体面は必ず守る」と宣言してくれた以上、萌衣も彼のために何かをしてあげたくて、結婚一週間後ぐらいから朝食だけ作るようにした。

もちろん玖生はいい顔をしなかったが、萌衣が、一人分も二人分も作るのって一緒に、普通に完食する日もあれば、明らかに箸の運びが悪い日もあると気付いた。

干渉しない契約があるので体調などを訊ねられなかったが、観察していく中でお酒を飲んで帰宅したのか、残業で遅くなったのがわかるようになった。

前者の場合は食欲が進まないが、後者の場合はしっかりと食事を摂るからだ。

これも長年秘書として務めているお陰だろう。

だからこそ感じた。一緒に朝食を摂り始めて以降、二人の関係が少しずつ、ただの同居人から、知り合いへと変わっていったのを……

二週間も経てば、まるで友人みたいに気軽に玖生の方から話しかけてくる日が多くなった。それに合わせて、取引先と接するような口調を改めてほしいと言われた。

確かに、外でもこんな他人行儀では夫婦に見えるはずもない。この結婚に裏があると思われないためにも、長年の友人と話す感じで接する方がいい。

萌衣は玖生に言われるがまま、少しずつ話し方を変えていった。

『最近会議や接待が多くて、会社にいる時間が減ったよ』

『まだ暑いから大変ね』

『シャワーでは身体に溜まった疲れが取れなくて……。バスルームを使ってる音、うるさくないか？』

『大丈夫。ぐっすり寝入ってるせいかな、全然気にもならない』

そんな気軽な会話をするまでになった。

緩やかだが、確実に玖生は胸襟を開いてくれている。つい先日、朝食時にやってきた彼の専属秘書、海藤孝史を紹介してくれたのもそうだ。

海藤——玖生から契約結婚の話を受けた日に見かけた、あの男性だ。

現在三十歳の海藤は、一八二センチと背が高いだけでなく体格もごつい。目の前の彼に圧倒される中、萌衣との契約結婚を唯一知っている人物だと玖生が話してくれた。

海藤の目つきを見る限り、あまり歓迎されていない雰囲気を感じたものの、萌衣は気

にせずに挨拶を返した。腹心を紹介してくれるまでになった玖生の気持ち嬉しかったからだ。

契約で迎えられた妻だが、時間をかけて接していけば、少しずつ二人の距離が縮まっていく。萌衣にとって何もかもが初めての経験なのだから、焦ってはいけない。

そんな感じで玖生の領域を決して侵さず、気を配りながら穏やかな結婚生活を送っている。正直、結婚して本当に良かったと思っていた。

あとは、玖生との生活で男性の心情を読み取れるように勉強しよう。そうすればきっといつの日か、自分の心にも変化が生じる。人を愛する気持ちもわかるかもしれない。

玖生との結婚生活は、一生ものと考えているから……

自分の覚悟に領いたのち、萌衣は席を立った。

「景山専務のところに行ってくるわね」

「わかりました。……学生たちが社内見学で来る頃には戻って来られますか？」

吉住に問われて、萌衣は小首を傾げて考える。

「どうかな。戻って来られなかったら、わたしの代わりに秘書に相応しい人がいるかどうか探って」

「オッケーです」

にこにこしつつ敬礼する榊原を見て、萌衣はぶつと噴き出す。でもすぐに彼女たちに

「よろしくね」と言って、秘書室をあとにした。

廊下を歩いていると、萌衣に気付いた男性社員たちが会釈してくる。萌衣も返礼するが、これまでと違ってほんの少し肩の力が抜けていた。

萌衣自身は何も変わらないのに、結婚前と結婚後ではこんなにも心の在り方が違うなんて……

萌衣は口元をほころばせてエレベーターに乗り込み、役員専用のフロアで降りた。

茶系の内装で統一された重厚感たっぷりのそこは、階下とは違って静まり返っている。受付の隣に飾られた、訪問客を出迎える生け花も見事だ。

萌衣は役員付き秘書になって以来毎日このフロアに足を踏み入れるが、未だにこの圧倒される雰囲気慣れない。しかしそれをおくびにも出さず、役員フロア専用のセキユリテイカードを使って奥へ足を向けた。

絨毯が敷き詰められた廊下を進み、景山の執務室の前で立ち止まると、ドアをノックした。

「水谷です」

「おお、入っておいで」

間を置かず、ドアの向こうにいる景山が答える。いつもは返事をもらえるまで数秒かかるのに、今日はなんと早いことか。

「失礼いたします」

萌衣はドアを開け、景山がいるマホガニーデスクに顔を向けた。けれども、そこにはおらず、萌衣はさっと周囲を見回す。

「……えっ!？」

応接セットのソファに座っている人たちが目に入るなり、驚きの声を漏らしてしまった。

「待ってたよ、水谷さん。もうそろそろ来ると思ってた……事前に連絡を入れなかったんだ」にこやかに迎えてくれた景山に対し、頭の中が真っ白になった萌衣は、呆然と立ち尽くす。彼の隣にHASEソリューションの吉沢が座り、二人の正面のソファに玖生が座っていたれば当然だ。

この状況はいったい!？」

突然のことにドアの前から動けないでいたが、なんとか強張る頬を緩めて皆に頭を下げた。ぎこちない足取りで景山の背後に向かうが、彼が「違う、違う」と声を上げて玖生の隣を指す。

今朝マンションを出ていった時と同じ、スタイリッシュなブラックストライプのスーツを着ている玖生を窺うが、彼は唇の端を上げるだけだ。

萌衣としては、景山に言われたとおり玖生の隣に座るほかない。

「……はい」

景山と吉沢から向けられる興味津々な目つきに耐えながら、萌衣は歩き出した。それにしても、この状況はいったいどういう意味があるのだろうか。萌衣は景山と吉沢の関係は知っているが、二人は萌衣と玖生の仲を知らない。

否、玖生がここにいるということは、萌衣たちが結婚したとバレている？ 仮にそうだとしよう。でもそれだけで、吉沢が玖生を連れ出せるとは思えない。彼はHASEソリューションの御曹司であり、管理本部の部長補佐として様々な部署を統括する立場だからだ。

そういえば、景山とHASEソリューションへ赴いたあの日、偶然前を歩く玖生を紹介してくれたのは吉沢だった。

つまり二人は気心が知れた仲？ それで吉沢に誘われるまま来たのだろうか。

萌衣は皆に「失礼いたします」と断って、ゆっくり玖生の隣に腰を下ろす。

「水谷さん、久し振りね」

ショートボブの吉沢が茶目っ気たっぷりにウインクし、ワインレッド色の口紅を塗った唇をほころばせた。

「ご無沙汰しております」

恭しく挨拶する萌衣に、吉沢はふふっと笑い、目を引くほど綺麗な脚を組んだ。

「今日のごめんなさいね。だってとんでもないことを知らされたら、居ても立ってもいられなくて」

「女って怖いな」

ボンツと呟いた玖生の言葉を、吉沢は聞き逃さない。

「女はね、勘が鋭いのよ。玖生、以後気を付けなさいね。……あなたも」

吉沢は玖生に言い、さらに景山にも念を押す。

「肝に銘じておきます」

苦笑いする景山に対し、玖生が恭しく答えた。

吉沢は二人の様子を愉快そうに見ていたが、不意に玖生に向かって片眉を上げる。

「玖生、いつまで奥さんを不安にさせてるの？ あなたから言ってあげなさい」

奥さん？ やっぱ知り知られていたのだ。そしてそれは、景山にも。でも吉沢は、いったいどうやって情報を得たのだろうか。

直後、玖生の咳払いが聞こえて、萌衣は彼に焦点を合わせた。

「萌衣。実は彼女、俺の母の妹……叔母だ」

叔母？ それって吉沢常務が親族ってこと!?

想像もしていなかった事実を目をばちくりさせると、玖生が申し訳なさそうに顔を歪めた。

「総務に俺の従妹がいるんだ。結婚の書類を提出したあと、偶然彼女のところに書類が回ってきて、それで慌てて叔母に訊いたらしい。母に言わなかったのは、妻が彼女の知る人物ではなかったから」

どうやって知ったのかと不思議に思ったが、ようやく謎が解けた。

個人情報取り扱い方には問題があるが、玖生が入籍したと知った親族が動転するのもわかる。その相手が景山の秘書となれば、尚更甥夫婦と一緒に話したいと思うのが普通だろう。

それで今回玖生を同伴させたに違いない。

「言ったでしょ？ 女は鋭いって。会社で起きる出来事は、誰よりもあたしが通じてる」

「両親に報告する前に、叔母に知られるとは思ってなかったよ」

「あたしは義兄さんより社内の動向に目を光らせているの。今回の情報提供者は姪だったけど、あたしの目や耳になってくれる人は他にもたくさんいるわ」

ふてくされる玖生に驚くが、萌衣はそれをおくびにも出さずに居住まいを正した。

実は玖生との結婚は、上司や友人のみならず、お互いの家族にさえまだ秘密にしている。政略結婚相手を欺くには、まずは夫婦間の距離を詰めるのが先決だからだ。

なのに、吉沢に知られてしまうなんて……

萌衣が込み上げてきた生唾を呑み込んだ時、吉沢がにっこりした。

「まあ、予想はついていたの。玖生が皆の目がある場所で水谷さんにキスしたと聞いたから」

玖生が観念するように大きく息を吐き出すのを耳にして、萌衣は膝に置いた手に力を込めた。契約結婚を提案された日にされたキスまで知られていることに、萌衣は驚きを隠せなかった。

いったいどこまで筒抜けなのだろうか。今はまだ二人は、とても愛し合って結婚した夫婦には見えない。もしかして、契約結婚のモノバレている？

「まあ、経緯はどうであれ、あたしは玖生の選んだ女性が水谷さんで嬉しいわ。彼女のことは宏明から聞いているし、あたしも自分の目で彼女の振る舞いを観察してきたから」

「そう言ってもらえて嬉しいよ」

玖生がほんの少し身体の力を抜くのがわかった。萌衣も、なんとなく上手くいきそう？と安堵しそうになるが、吉沢の次の言葉で一瞬にして緊張が復活した。

「それにしても不思議ね。つい先日まで付き合っていた、あの有名女優と全然雰囲気が違うわ」

じよ、女優？ 女優が恋人だったの!?

有名女優の恋人を捨てて萌衣を選ぶとは、信じられない。

「叔母さん……」

玖生は苦笑いするが、萌衣に元カノの存在を知られたという焦りはなく堂々として
いる。

普通なら居心地悪そうにするものでは？

しかし、実のところ萌衣自身も気にならなかった。どちらかと言えば、有名女優と付
き合える男性が、萌衣を選んだという事実には狼狽うろたえている。

「昔の話はいいじゃないか。二人は結婚して一緒に歩み始めたんだ」

「宏明の言うとおりね。あたしたちも今を生きているんだし」

吉沢が景山の手を取る。仲睦なかつましいその姿に、自然と心の中がほんわかしてきた。二
人を羨ましく思いながら玖生を窺うと、彼が萌衣の視線に気付く。

「なんだ？」

「ううん、別に……」

萌衣が玖生に向かって微笑みかける。

「今日来て良かったわ。ただ姉さんは……息子の結婚に難を示すと思うけど。ほら、い
るいろとね。とにかく、あたしは甥っ子夫婦の味方よ」

「良かったね、水谷さん。桐子の後ろ盾があれば安泰だ」

景山が、ようやくこころざとばかりに笑みを向けてきた。

「そうよ、安心してね。さてと、そろそろ二人を解放してあげるわ。玖生、一時間後に

迎えにきて」

「わかった」

「じゃ、水谷さん。長谷川さんのお相手をしてくれるかな？ 役員フロアのコミュニティ

スペースで過ごせばいい」

「ありがとうございます。そのようにいたします」

玖生と萌衣は小さく頭を下げると、二人して執務室を出た。

「悪かったな。いきなり叔母に会わせてしまって」

玖生に謝られると思っていなかった萌衣は目を白黒させ、急いで「ううん」と首を横
に振った。

「甥っ子が誰にも告げずに結婚したと知れば、その相手に会いたいって思うのが普通だ
もの」

そう言って廊下の先を手で示し、玖生より先に歩き出した。

「個人情報管理能力がないと従妹にきつく言っておくよ」

「あまり怒らないであげてね。従兄いとこの結婚に驚くのも無理はないし」

「運が悪かったな。俺の書類が偶然従妹の手に回るとは……」

萌衣が苦笑いした時、コミュニティスペースに到着した。ソファや大型テレビ、ドリ
ンクサーバーが設けられているそこには、誰もいない。

「好きなどころに座って」

萌衣は肩越しに玖生に話しかけて、コミュニケーションペースに誘導する。彼は歩きながら上着の前ボタンを外して、ポケットに片手を入れた。

そこから滲み出る男らしさを目の当たりにし、萌衣の胸の奥が妙にざわざわし始めた。突如湧き起こった症状に困惑した萌衣は、すかさず玖生から目を逸らす。

あれ？——と軽く小首を傾げて胸に手を置き、トクトクトクッと早鐘を打つ心臓をなだめる。そして息苦しさを紛らわすように咳払いし、壁際に設置されたドリンクサーバーに向かった。

「飲み物を淹れるけど何がいい？ カフェラテ？」

「ああ」

玖生が家でもよく飲むのでそう訊ねると、彼は機嫌よく返事する。たった一言なのに心が和み、萌衣の頬が緩んだ。

殺菌デイスペンサーからカップを取り出してサーバーにセットする。

「ここから木々が茂る公園を眺められるんだな」

「ええ。ここでレクリエーションする役員も多いんだけど、今日は誰もいなくて良かった」
「こういう場所、いいな。うちの会社でも作ろうと提案しようかな」

玖生の咳きか聞こえると、肩越しにそちらを見る。彼はソファに座ったまま上体を捻

り、大窓から望める景色に見入っていた。

「吉沢常務の賛同がもらえたら、一番いいかもね。決定権がある方だから」

「……そうだな」

不意に玖生の声のトーンが低くなった気がして、そちらに意識が向く。だが萌衣は、ひとまず二客のカップにカフェラテを淹れ、銘々皿に北海道のバターサンドやクッキー、塩気のあるせんべいなどの茶菓子を盛る。それらを載せたトレイを持ち、彼の方へ向かった。

萌衣はローテーブルにカップと銘々皿を置き、玖生の隣に腰を下ろした。

「どうぞ」

「ありがとう」

玖生がソーサーを手に取るのを見て、自分も倣う。カフェラテを啜ると、いい香りが鼻を抜けた。

「美味しい……」

玖生の深い感嘆の声に、萌衣も嬉しくなる。温かくて濃い味に心が癒やされるのを感じながら、彼に茶菓子も勧めた。

マンションのダイニングテーブルには、バウンドケーキやおかきなど、手軽に小腹を満たせるお菓子を置いている。玖生もよく手を伸ばすので、銘々皿に載せたお茶菓子も

嫌いではないはずだ。

想像したとおり、玖生はバターサンドを一口食べるなり満足げに頷いた。それを見て、萌衣はにっこりした。

「うちの常務がよく北海道に出張で行くんだけど、そこで気に入ったらしくて、定期購入して置いてくれるの。ここだけでなく、階下のコミュニケーションスペースにも」

「俺も気に入った。うちでも定期購入しよう」

「玖生さんの部下……海藤さんも喜んでくれると思う。なんでも食べそうなら大きいから」

萌衣は見事な体躯たくを持つ海藤を真似るように、自分の身体を手で大きく見せる。笑うかと思いきや、玖生は微妙な顔つきで片頬を引き皺しわらせた。

「いや、うっちっっていうのは会社じゃない。家のことだ」

「えっ?」

そう言われて、萌衣は玖生が口にした、うっちの意味がようやくわかった。

「ごめんなさい。会社の話をしていたから、てっきり……。じゃ、わたしに任せて。玖生さんの家に届くように手配しておくから」

自分の勘違いに笑いながら、頭の中で、バターサンド、定期購入、ネット、チェックとインプットする。その途中で、バターサンドを持つ玖生の手が動いていないことに気

付いた。

「く、玖生さん? どうしたの? 何か……?」

さりげなく面を上げると、玖生が真摯な目つきで萌衣を観察していた。いつもと違う様子に、萌衣の笑みが段々と消えていく。しかも、場が変な緊張感に包み込まれていった。玖生に対してこれほど身構えたのは、初めて話しかけられたあの日以来だ。

結婚して、もう一ヶ月以上経つ。共に朝食を摂る生活を続けて、少しずつ二人の距離が縮まってきた。今もその最中で、最近ではさらに打ち解けた口調で接している。

二人の関係はいい流れに乗ったと思っただけに、玖生のただならぬ雰囲気は体温がぶわっと上昇し、首の後ろが湿り気を帯びてきた。髪は軽く捻り上げてアップにしている。暑いわけではないのに、首の汗を拭ぬぐって髪を払いたくなる。

ああ、お願い。何を言いたいのかわからない表情を向けなくて……

「わたし、変なことを言った?」

そう言っても、玖生は言葉を発さない。しばらくの間、萌衣をまじまじと見つめるだけだ。

これ以上、萌衣が玖生の真意を汲み取るのは無理だと思いついた時、彼が眉根を寄せた。「一緒に生活する中で、萌衣が俺に慣れようとしてきたのは知ってる。そんな君を見て、俺も歩み寄らなければと思うようになった。それもあってか、意外に夫婦生活は苦では

ないんだと知った。だが、あの姿は偽りだったんだな。俺の知る君は、家限定……。この俺がすっかり騙された」

玖生の様子が明らかにおかしい。別に怒ってはいないが、声音の端々から萌衣を責めているように感じられた。でも、萌衣のどこに引かかったのかさっぱりわからなかった。

「ごめんなさい。あの、わたし……何か間違ってた？」

恐る恐る訊ねると、玖生は手にした食べかけのバターサンドを銘々皿に置いた。

「最初に気付いたのは、景山専務の執務室だ。俺の元カノの話題が出て無反応だった」

「元カノが女優だと知って驚いたけど、今は関係ないかなって」

「……だろうな。じゃ、俺と二人だけなのに、どうして叔母を常務と？」

立て続けの質問にどぎまぎしながら、萌衣はその時の状況を振り返る。

「義叔母さんだと知ったのはついさっきで、わたしの中では取引先の吉沢常務という位置付けだったから」

「確かに、萌衣は常務としての叔母さんと面識があったから、そうなるのが普通だ」

玖生は膝に両肘を載せて前屈みになり、淡々と話す。その間も自分の手元に視線を落としていた。こちらを見ていないのに、萌衣はそのとおりだと小刻みに頷く。

「わたし——」

これからきちんと義叔母さんって言うから——そう口にするつもりだった。しかし、

立ち読みサンプル はここまで

顔を上げた玖生の目に射貫かれて、萌衣は何も言えなくなる。

「百歩譲って、その二つはいいとしよう。だが、どうして俺の家なんだ？ 今は二人の家だろ？」

「えっ？ あっ……」

指摘を受けて、萌衣は愕然とした。

もう一ヶ月以上生活を共にしているのに、心のどこかでまだ玖生のマンションだという考えがあった。

まさか結婚を実感しきれていない？ ——自分への問いかけに、心の中で激しく否定する。

してる！ しているが……

「あの、もう少し時間が経てば、もっと慣れると思う。……結婚生活に」

「それは暗に俺に文句を言っているのか？」

「文句？ ……そんな風には言っていない」

玖生が自由気ままに過ごしていても不満はない。今のままでも充分幸せだし、その上で彼との結婚生活を大切にできたらいいと思っている。

「契約は忘れてないから。わたしは玖生さんに干渉せず、引かれた一線を越えないようにしながらも、妻としてきちんと振る舞って——」